

# 母娘関係を考える

## —草間彌生の作品を中心に—

中村 圭美 (立教大学大学院 文学研究科 比較文明学専攻 博士後期課程)

### 1. 草間彌生と母

家父長制の伝統が色濃く残る戦前の長野県・松本にある旧家に、前衛芸術家・草間彌生は生まれそして少女時代を過ごした。彼女の、幼少の頃からの、いたるところに斑点の見える幻覚、その原因の大きなものの一つとして頻繁に取沙汰されるのが、草間家の抑圧的な家父長主義的家風である。

しかし幼少期からの草間への「抑圧」の中心は、家父長たる父親だったのであろうか。

草間は絵画、彫刻などのほかに、文学作品も少なくない数を著している。その中に、松本を思わせる日本の田舎を舞台にした作品がいくつかある。そのいずれも、主人公は少女であり、そして、いずれにも、その少女を虐める母親が登場する。

『心中櫻ヶ塚<sup>1</sup>』の主人公マッチャーは12、3歳の少女。母親が稼いだお金も巻き上げて女郎屋へ行くような父と、夫婦喧嘩が絶えない状況により心が荒れてしまいストレスの捌け口として子供にあたってしまう母。この愛情に恵まれていない家庭で少女はいつも、両親の言い争い、母親の虐待に脅えながら、心が沈んだ生活を送っていた。大人たちに傷つけられ、一日一日を過ごすだけで精いっぱい毎日。そんな環境のもとにいるマッチャーは、心の傷から神経病となってしまう。

『離人カーテンの囚人<sup>2</sup>』の主人公の少女キーコの体には、母親から受けた折檻の痕がある。母親は、資産家一族の娘。夫も資産家一族の息子であったが放蕩息子であったので、やっかい払いするために婿養子に入れさせられた。夫婦仲は悪く、次から次へと女のところを渡り歩く夫に嫉妬する妻（主人公の母親）は、そのストレスを子供たちへぶつける。母親のヒステリーや暴力に怯えながら生きていたキーコ。精神が極限状態に置かれた彼女は、離人症を発症してしまう。

『すみれ強迫<sup>3</sup>』は、16歳のサチコが主人公。絵を描くことが好きな彼女は、自らが体験したことを絵で表現する。その体験とはしかし、幻覚である。彼女がそのような体験をするようになったこと、つまり精神的な病をもつようになった背景には、家庭環境に起因するものがあつた。サチコの祖父は大地主で地元の名士。父親は入婿で、事業家である義父には大学出の参謀格の人物として重宝されているが、サチコの母親とは仲が悪く他の女性のところに入り浸ったりしている。サチコの母親も精神状態が不安定で、夫以外の男性とも性交渉をもつ。彼女自身の精神の不安定からか、それともサチコの通常とは異なる性質に対していらだちを覚えるのか、サチコへの暴力が日常的にふるわれる。

草間の小説に登場する母親はこのように、嫌悪の対象としていつも描かれる。一方父親に対しては、それほど嫌悪の情を持ってはいない。「家父長主義的」に娘を抑圧するのは母親なのだ。草間の作品をそのまま草間の生い立ちに当てはめることはもちろんできないが、これほどまで執拗に母親というものを少女を抑圧する存在として描いているのは、やはり草間自身の体験が色濃く反映されているからではないかと推測するのは、誤りではないだろう。本稿において後述する、彼女の自伝『無限の網<sup>4</sup>』における母親に対する記述は、そのことを裏付けてくれるように思われる。

## 2. 基子と母

母と娘の関係をテーマにした物語は、見かけることが少ないような印象が強いかもしれないが、実はさまざまな形で作り出されている。

2003年に放映されたテレビドラマ『すいか<sup>5</sup>』は、そのようなものの一つとして挙げられよう。母（及び父）と同居している34歳の独身OLが、その主人公である。母親の希望通りに短大を卒業し地元の信用金庫に14年勤め続けている主人公・早川基子。いくつになっても親から自立できず、職場でも同世代の女性は既にほとんど退職してしまってもう居場所がなく、とても「煮詰まって<sup>6</sup>」いる。そんな彼女は、いくつかの偶然の連鎖から、賄いつきの下宿・ハピネス三茶と出会う。このハピネス三茶が、ドラマの舞台の中心である。

基子が煮詰まってしまったその一番の原因が、母親との関係である。娘思いの母親。そうであるがゆえに、娘の幸せを願い、ことあるごとに早く結婚しろと口にする。そんな母親を疎ましく思いながらも、一方ではとても大切にも思っている基子。母親の希望通りに入った信用金庫での仕事が面白いわけではなく、そこでの居心地が決してよいわけでもない。しかしやりたいことがこれとあってあるわけではない。どのように生きてよいかわからないまま、自分で何かを決めることもなく、母親のいる家と会社との往復で過ぎていく日常。

このような中で煮詰まってしまった基子が、母親とのちょっとしたことがきっかけで家を飛び出してしまう。行った先は数日前偶然その存在を知ったハピネス三茶。基子が、そこに住むことを自分で決めたのだ。年齢も境遇も異なるハピネス三茶の下宿人たち。彼女たちの存在がハピネス三茶へ来る要因だったかもしれない。他に行くところがなかっただけかもしれない。しかしともかく、そこで彼女たちと日々生活を共にし触れ合っていくことで、基子は少しずつ変化していく。基子だけでなく、他の下宿人たちも、お互いの存在を通して、それぞれの新しい生き方を模索し見つけていく。そのようなドラマである。

## 3. 雪夜と母

もちろん、母と娘の関係を描いているのは、テレビドラマだけではない。たとえば、近藤ようこは、すぐれた作品を作り続けている漫画家であり、それら作品のほとんどに母娘関係が深く関わっている<sup>7</sup>。

『雪夜の告白<sup>8</sup>』の主人公の母親は、上品で知的な美貌をもつ映画女優。主人公・雪夜はしかし、母親とは似ても似つかない容貌であった。雪夜は、その容貌に常にコンプレックスを持ち、そしてその容貌ゆえに母親から愛されていないと感じていた。醜さゆえに受ける嫌な出来事の数々。母はよく雪夜を連れて歩いた。母親の一番身近な引き立て役だと感じていた雪夜には苦痛だったが、母にはそれが理解できていないようだった。雪夜の唯一の親友・安良が、その美しさから女優としてスカウトされると、以前からその子の自然な振る舞いを気に入っていた雪夜の母は、自らの後継者にと熱心に稽古をつけた。雪夜は、自分には決して向けてくれない熱意を親友に注ぐ母に対して、憎しみを覚えた。

高校を卒業しその後、家に閉じこもりがちだった雪夜は、母親への憎しみを日々つららせていった。そしてある日、彼女は母親を自宅の階段から突き落とす。母は亡くなり、そしてそれをきっかけに雪夜は顔を整形する。美しく顔を変え、そして名前も変えて、醜かった過去を捨て新しい生き方を、と模索するのであった。

## 4. シズコさん

草間彌生とほぼ同世代の絵本作家・エッセイストの佐野洋子<sup>9</sup>も、『シズコさん<sup>10</sup>』において、母親へ

の愛憎を書いている。

『シズコさん』は小説ではない。実話である。シズコさんは、佐野洋子の母親。結婚して北京で暮し、終戦、引揚げの間に三人の子供を亡くす波瀾の人生。しかし佐野は、そんな母親をいっぺんも好きになったことがないと書く。「私は母に子供の時からなでられたり、抱きしめられたりしたことがなかった。四歳位の時、母が私の手をふりはらった時から、私は母の手にさわった事がない」（佐野、2008：205）。読んでいて伝わってくるのは佐野と母親の相性の悪さ。母親は、ごめんなさいとありがとうを絶対に言わない。娘のことを決して褒めない。北京から引き揚げてから山梨で暮らしていた三年間、母は娘を虐待すらすらする。

佐野はこの本で述べる。「私は、ずっと私の半生をかけて、母親と娘というものは特別に親密なものに違いないと思っていた。私だけなのだ、母親が嫌いなのは」（佐野、2008：194）。しかし、「四十を過ぎて、自分の母が嫌いな人が沢山居るのを知って驚いた。あゝ居るのか」（佐野、2008：155）。

沢山居るのは、例えば、信田さよ子著『母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き<sup>11</sup>』を読めば明らかである。カウンセラーである著者が、数多くのカウンセリングに基づいて、「母との名状しがたい関係に苦しみながら、それでも罪悪感にとらわれている女性たち」について書かれた本である。

そこには、独裁者としての母と従者としての娘、殉教者としての母と永遠の罪悪感にさいなまれる娘、同士としての母と絆から離脱不能な娘、騎手としての母と代理走者としての娘、嫉妬する母と芽を摘まれる娘、スポンサーとしての母と自立を奪われる娘（信田、2008：98-116）、などなど、さまざまな事例が描かれ、そして母親からの苦しみがそれぞれ描かれている。

## 5. 母と娘というテーマ

このようなものであるから母娘関係は現在、フェミニズム関連の研究において大きな issue となっている。

水田宗子は述べる。「女と女の関係、女同士の影響とその絆、母と娘の関係、母の娘への影響とその絆は、フェミニズムがそれについて語り始めるまで、ほとんど無視されてきた、書かれなかった歴史であった」（水田、1996：14）。これは佐野が言うように、「フロイトは父と子との関係、母親と息子の関係は研究したが、母と娘の関係をシカトしたのはフロイトが男だったからだろうか」（佐野、2008：155）。

上野千鶴子は、フロイトを女性の側から読み直してフロイト理論の男権性を暴き出すという作業が、1970年代になって初めて、フェミニストたちによって進められ、それ以降、母と娘の関係、娘の自我形成の物語がずっと扱われ、成果を挙げてきている、と述べている（上野、1996：203）。

1970年代以前、フロイト学説における父と息子の関係と同様、娘にとって最も影響力が強いのは父親だ、と考えられていた（上野、1996：204）。実際この時期の、職業的、社会的に成功していた女性たちは、父親からの影響が圧倒的であったであろう。父と同一化したはずの彼女たちは、しかし、男に対してどう振舞うかに関しては、母親をモデルにするしかなかった。ナンシー・フライデーは、ある精神科医の言葉を借りて、「会社での態度については、父親をモデルにできますが家庭で、デートで、ベッドで男に対してどう振舞えばよいかという感情的なものは、母親との関係に基づいています（フライデー、1980：26）」と指摘している。

このようなフロイト学説における父と息子、父と娘の重視による現実との齟齬に対して、70年代以降、フェミニズムの側から批判的研究が行われるようになる（上野、1996：205）。そこで、母と娘の関係が大きなテーマとして浮上してくる。

## 6. 母とはどのような存在か

家族の物語において母という存在は、父と息子の関係の横で、いつも愛と慈愛にみちたものとして描かれてきた。母は、夫のため息子のため家族のために、自己を犠牲にして献身し介護し許す存在であった。そのような存在として、「いつも郷愁とともに語られてきた（水田、1996：14）」。

しかし娘にとっては、母親をそのような存在として捉えるわけにはいかない。草間の小説に登場する母は娘を虐待するし、『すいか』の母は娘に常に有言無言の抑圧をかける。『雪夜の告白』の母は憎しみの対象であったし、佐野洋子は母を好きであったことは一度もないと書いた。

こういった母、郷愁としての物語にはなりえない母は、娘にとってどのような存在なのだろうか。それは、水田がいうように、「父の制度の代行者としての強い母への依存と恐怖と、父の制度の犠牲者としての弱い母への同情と嫌悪をぬきにしては語るができない存在（水田、1996：14）」である。

草間はさまざまところで、画家になることを反対された少女時代について語っている。「当時の社会通念からすれば、「女性には画家としての将来性なぞない」というのが一般的だったし、とりわけ旧弊で封建的な我が家の家風では、「絵描きや役者なんてあんなものは・・・」という観念から抜けきっていなかった（草間、2002：64）」。その封建的な家において、特に母親からはものすごく反対されたという。「私が絵を描いていると、机をひっくり返したり、絵を破り捨てたりする。だから、私の中では母親に対するものすごい確執があった」（草間、2002：65）。そしてことあるごとに金持ちのところへ嫁に行けと言われ、写真を沢山見せられたという（草間、2002：66）。ここで述べられている母は、父権的なものを増強する存在としての母、つまり「父の制度の代行者としての強い母」である。「子供の頃の母の思い出といえば、朝から晩まで、叱られ、殴りつけられたことばかり（草間、2002：107）」。そして、このような母に対する一種の恐怖である。

そんな草間の母は、父（草間彌生の父）と年中けんかをしていたという。養子で草間家に入った父は、芸者遊びばかりして妾を持たない時期がなかったほどであったからだ（草間、2002：107）。草間は述べている。「男は無条件にフリーセックスの実践者であり、女はその陰でじっと耐えている。そういう姿を目の当たりにして、子供心にも、「こんな不平等なことがあっていいものだろうか」と、強い憤りと反発を感じたものだ（草間、2002：108）」。父が妾の所へ行くとき、母の言いつけで草間は何度も父を尾行したという（草間、2002：63）。ここにあるのは、草間の「父の制度の犠牲者としての弱い母親への同情と嫌悪」であろう。

父の制度の代行者としての母と、父の制度の犠牲者としての母。ここには、娘が成長する過程での目指すべき自分のモデルを見出すことができない。それどころか母を否定し、母の影響から逃げようとさえするだろう。特に草間は、その境遇から、早く逃れたいと思う傾向が強かったであろう。草間は、かかりつけの精神科医から、「家にいたらあなたはもっとノイローゼになるから、少しでも早くお母さんから離れなさい」と進められ、日本からの脱出を真剣に考えるようになったという（草間、2002：70）。彼女の場合は、逃れる先は絵描きになれる場所。それがニューヨークであった。

## 7. 身体化と複雑さ

しかしもちろん、母親が好き嫌いというのは、そんなに単純なものではない。角田光代も次のように述べている。「母もくしは家族について、嫌いだったとか好きだったとか、葛藤があったとかないとか、そんなシンプルなことってないだろうと思うのだ。カリフラワーを好きか嫌いかという話ではないのだ<sup>12</sup>」。

母と娘の関係は複雑で深い。

現在残っている一番古い草間の作品は10歳の頃に描いたデッサンであるが、そのモデルは母親である。渡米の際には家族で写った写真をしっかり持って行っている<sup>13</sup>。あれだけ草間が絵描きになるのを反対していた母親も、草間の渡米に尽力した。

草間の母は歌人であったのだが、死後、草間が遺品から見つけた三首を『心中桜ヶ塚』の末尾に採録している。「母に対する私の想いは、そして父に対する私の想いは、万卷を費やしても語りきれものではないが、自分の著作の中に母の歌を添えることによって、私は父と母の思い出の片鱗を定着させたかった（草間、2002：225）」と述べている。

自伝であれほどいやな思いをさせられたことを書いているにもかかわらず、やはり、というか当然とというか、母への想いは特別なものなのだろう。

このような複雑さの背景にあるものは身体である。母と娘の身体である。

『すいか』では、主人公・基子が煎餅を食べる場面が二度登場する。この食べ方が特殊で、クズが落ちないようにときどき吸いながら食べるのである。母親がきれい好きで、このように食べるようになってしまったと基子は解説する。母親がハピネス三茶に来たときも、やはり基子と全く同じ食べ方。母親の考え方が娘に身体化されているのである。それは娘が幼いときから少しずつ二人の関係性においてつくられていくもの。母と娘の関係はこのように日々作られ身体に刻み込まれていく。そこには愛憎がもちろん練り込まれる。だからそれはねじくれもするし、こんがらがったりもする。そうして出来上がっていく母娘関係は根が深く複雑であらざるをえない。

母と娘の関係とはこのようなものであるから、佐野洋子は好きではない母の手をずっと触ることができなかった。

『シズコさん』の後半。佐野の母親は次第に呆けはじめ、佐野はやがて老人介護施設に入所させることを決意する。そしてその後ずっと佐野は、母親を捨てたのだと自身を苛む。介護施設で母の痴呆は進み、しかし、以前は決して口にしなかったありがとうごめんなさいを、「バケツでぶちまける様に」言うようになり、そして仏さまのように柔和になる。母を好きになれず、母に触れることができなかった佐野は、あるとき突然、ゆるされたと感じる。きっと佐野自身もゆるしをしたのだろう。角田光代は佐野の本を評して、「ゆるされること、ゆるすことがどんなにきれいごとでないか、どんなに長い道のりの先にあるのか、思い知らされる<sup>14</sup>」と述べている。「ここには奇跡のような瞬間が描かれている」。そしてもうその頃には佐野は母親の手だけではなく足までさすれるようになっていた。

## 8. 奇跡のような瞬間

「奇跡のような瞬間」。それは『すいか』でも描かれている。

ハピネス三茶での毎日、そこで一緒に暮す人々との生活の中で、少しずつ、いろいろなものの関係が変化してきた基子。母親が退院した日、病院からの二人の帰り道。いまだに家を出ることを許していない母親に、自分で納得できる人生送りたい、自分で決めたことだから、と小さいながらも力強い声で話す。今まで基子は母親にそのように話したことはなかった。すると母親は、何か意を決したように小走りでもどこかへ消え、戻ってきたときには饅頭の入っている手提げ袋を持っていた。これをみなさんに、と母親。ハピネス三茶で開けるとそこには「独立記念日」と書かれた紅白饅頭が入っていた。

基子が母親から「独立」した瞬間、それがこの母と娘、二人のシーンであった。

『雪夜の告白』でも、そのような「奇跡のような瞬間」がある。

雪夜は、幼いときから自らの顔を常に意識して生活してきた。その顔はまだ見ぬ父から多く遺伝子を受け継いだかもしれないが、母親との日々の生活で創りあげられてきたものである。いわば自らの身体は母親との身体。そんな自らの顔を、母親を階段から突き落としたことをきっかけに整形して変えてしまった雪夜。ずっと罪の意識に苛まれていた彼女が、命日に初めて墓参りに行くと、かつての親友・安良も来ていた。そこで初めて安良から、母が自分を許してほしいとかつて語っていたことを聞く雪夜。母も苦しんでいたのだ。それを聞いて「お母さま…許すわ…だから私も許して…」と雪夜は墓に話しかけるのだった。

草間彌生にはそのような瞬間があったのだろうか。

小説の主人公たちはみな、マッチャーもキーコもサチコも、悲劇的な最後を迎える。これらの作品は80年代90年代に書かれたものであった。

2000年以降、草間の旺盛な創作意欲は全く衰えることなく、小説は書かなくなったものの、大規模な野外彫刻やインスタレーションなどで新たなチャレンジを次々とするようになっていく。『ハイ、コンニチワ!』もそのような試みの一つである。それは、大量の女の子のドロイングと数体の女の子の巨大なフィギュアが組み合わさったインスタレーション。展示室には香りのよい干草が敷き詰められ、幸せな空気が漂う空間になっている。『ハイ、コンニチワ!』がはじめて展示された展覧会『クサマトリックス』の会場では、壁面に草間本人が「少女たち！青春がやって来るらしい！」と書き添えた。少女時代にこのようなものになりたかったという想い<sup>15</sup>を作品にした、この『ハイ、コンニチワ!』は、従来の草間作品にはなかった、ポップでハッピーな感覚をその場を体験した者に感じさせるものとなっていた。少女時代に正面から向き合い、今は亡き母親とも向き合ったゆえの、この作品だったのではなかろうか。もしそうだとすれば、「奇跡のような瞬間」が草間にもやってきていたのだと、考えてもよいのではなかろうか。

## 《脚注》

- <sup>1</sup> 草間彌生、1989年、『心中櫻ヶ塚』、而立書房。
- <sup>2</sup> 草間彌生、1989年、『クリストファー男娼窟』所収、而立書房。
- <sup>3</sup> 草間彌生、1998年、『すみれ強迫』、作品社。
- <sup>4</sup> 草間彌生、2002年、『無限の網』、作品社。
- <sup>5</sup> 脚本・木皿泉、プロデューサー・河野英裕、2003年7月～9月日本テレビで放映。  
視聴率は高くはなかったが、脚本を担当した木皿泉は、この作品で「向田邦子賞」（すぐれたテレビドラマの脚本に与えられる）を受賞した。
- <sup>6</sup> 第1話の中で、下宿・ハピネス三茶の大家である柴本ゆかは、主人公・早川基子のことを「一言で表現するなら煮詰まった人です」と描写するシーンがある。
- <sup>7</sup> 母娘関係を扱った主な作品に2000年、『アカシアの道』、青林工藝舎。2002年、『雪夜の告白』、青林工藝舎。2002年、『鋼の娘』、祥伝社などがある。『アカシアの道』は、2000年に監督・脚本・松岡錠司、主演・夏川結衣、渡辺美佐子により映画化された。
- <sup>8</sup> 近藤ようこ、2002年、『雪夜の告白』、青林工藝舎。
- <sup>9</sup> 1938年北京生まれ。絵本作家、エッセイストで、代表作に『100万回生きたねこ』、『神も仏もありません』などがある。
- <sup>10</sup> 佐野洋子、2008年、『シズコさん』、新潮社。
- <sup>11</sup> 信田さよ子、2008年、『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』、春秋社。
- <sup>12</sup> <http://www.shinchosha.co.jp/shinkan/nami/shoseki/306841.html>
- <sup>13</sup> 霧島アートの森美術館のホームページ  
[http://open-air-museum.org/ja/art/exhibition/past/2002/yayoi-kusama/dot\\_report-slide.htm](http://open-air-museum.org/ja/art/exhibition/past/2002/yayoi-kusama/dot_report-slide.htm)
- <sup>14</sup> <http://www.shinchosha.co.jp/shinkan/nami/shoseki/306841.html>
- <sup>15</sup> 草間彌生インタビュー（聞き手：斉藤環）。斉藤：いままで人物をのものをモチーフとするような作品はそんなに多くなかったと思うんですけども、何か草間さんのなかで変化があったわけですか。草間：そうですね。描いてみたいと思ったの、もう少し明るい作品を。少女時代にあまりにもみじめだったから。これは<ハイ、コンニチワ！>という題なの。斉藤：幸せな少女たちを描いてみたい、ハッピーなイメージでということでしょうか。草間：ええ。子ども時代にこういうものになりたかったという。『美術手帖』2004年3月号、34ページ

## 《参考文献》

- 上野千鶴子 1996年 「母性を問うー<母と娘>という主題」『母と娘のフェミニズム』所収 田畑書店
- 木皿泉／山田あかね 2004年 シナリオ Book『すいか』日本テレビ放送網株式会社
- 草間彌生 1989年 『心中櫻ヶ塚』 而立書房
- 草間彌生 1989年 「離人カーテンの囚人」『クリストファー男娼窟』所収 而立書房
- 草間彌生 1998年 『すみれ強迫』 作品社
- 草間彌生 2002年 『無限の網』 作品社
- 近藤ようこ 2000年 『アカシアの道』 青林工藝舎
- 近藤ようこ 2002年 『雪夜の告白』 青林工藝舎
- 近藤ようこ 2002年 『鋼の娘』 祥伝社
- 佐野洋子 2008年 『シズコさん』 新潮社
- 信田さよ子 2008年 『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』 春秋社
- ナンシー・フライデー 1980年 『母と娘の関係』上・下巻 講談社  
(原書は、Friday, Nancy, "My Mother/My Self :The daughter's search for identity," Delacorte Press,1977)
- 水田宗子 1996年 「<母と娘>をめぐるフェミニズムの現在」『母と娘のフェミニズム』所収 田畑書店  
2004年3月号 『美術手帖』 美術出版

